(一) 第811号 【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】 THE MIIKE (毎月1日、16日発行) 昭和41年11月1日(火)

「打切り」粉砕へ総決起

内外へ強くよびかけ
あらゆる戦術を行使

去る一〇月二七日、労仂省と政府が全く不当にも一方的に一酸化炭素中毒患者に労災補償の打切りを通告してきたことに対して、一〇月二八日午後六時半から荒尾公会堂で開かれた中央委員、地域分会長、主婦会合同の緊急中央委員会は、つぎのようなたたかいの方針を決定し、「打ち切り」通告紛砕へ総決起することを決定した。

体制的な攻撃

中央委員会で、塚元書記長はつぎのように方針を提起し、満場一致確認をうけた。

今回の労災補償打切り措置は、政府と独占資本が一体となって、一切の国家権力をもって労仂者の反対を押し切り、資本の意思を通そうとする意志統一のもとに強行してきたものである。われわれはこの認識の上に立って、全力をあげて遺族・被災者の要求を闘いとるため、次の具体的行動を行う。

各地へ実態を訴える

九州各県評と社会党県連に次の支援行動を要請した。

①今回の不当措置をとった労仂大臣、福岡・大牟田両労仂基準監督署長に対し、抗議行動及び抗議電、抗議文を出して下さい。

②遺族・被災者の実態を機関紙ビラなどで全労仂者に周知徹底して下さい。

③現地の患者、家族に対して激励の電報、手紙、ハガキを出して下さい。

また市民へのアピールは、署名活動とともに写真展、ビラなどで実態を訴える。まず一〇月三〇日は大牟田・荒尾地区の大宣伝日とする。

第二組合員との共闘

第二組合への共闘申入れは、二六日菊川組合長及び中央委員会に対して、口頭と文書で行なったが二八日「三池労組とは闘いの方向が違う」という理由で共闘拒否の回答があった。しかしわれわれは非人間的な政府と会社の攻撃の本質と患者の実態を第二組合員と家族に積極的に訴え、署名活動を行なうとともに、反労仂者的第二組合幹部の利敵行為の変更を強く要求する。

闘いはCO問題に集中

今後の闘いは、遺族・被災者問題に集中する。具体的戦術については執行部に一任願いたい。

〝こんな非人道的なことが許されていいのか〟と大牟田労基署に抗議する患者と家族

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話③3033番
③3034番
編集兼発行人 山下 開
年間600円 送料共

第五回無料法律相談のお知らせ

一、一一月一九日(土)午前一一時から三池労組本部にて

一、面接弁護士 角銅先生、鍬田先生

法律相談は組合関係以外の一般の方でも、ご相談に応じます。

三池労組法対部

被通告者	738名
三池労組	264名
第二組合	390名
職組	51名
組夫	33名

( )内は三池労組

1〜2月延長	58 (45)
長期傷病給付切りかえ	26 (11)
退職者	14

三池労組の内訳

( )内は通告を受けた人

入院患者	155 (117)
通院患者	62 (47)
万田回復訓練所	97 (94)
その他	6 (6)

全労働者を結集し最後まで闘い抜く
—三池労組の決意—

去る一〇月二八日の中央委員会で、宮川組合長はつぎのように三池労組の闘いの決意をのべた。

「労働者の生命を無視した生産第一主義の結果ひきおこした三川鉱爆発は四五八名の死者と八〇〇名の一酸化炭素中毒患者を出した。

患者の労災補償を打切り、重症者のクビを切るという、この攻撃は、爆発の責任は三井鉱山にはないという、権力の圧力による不起訴処分とあいまって出されたものであり、われわれがこの三年間闘いつづけてきた一酸化炭素中毒特別立法制定運動でかちとった成果を一挙に骨抜きにしようとするものである。

これは石炭政策の推進のために資本が加えてきた先制攻撃であり、全労働者を結集して、ありとあらゆる大衆行動、ストライキ戦術を行使し、闘い抜かねばならない。

とくに、第二組合員や市民、総評、社会党などに働きかけることを具体的にすすめることが勝利への道であり、佐藤内閣を打倒することにつながる。

三池労組は被災者と遺族をまもり、三井と政府の責任を最後の最後まで追及し、闘い抜くことを決意する。

またガス患者が発生
奔別鉱(北海道)でガス爆発

一一月一日午前二時四五分ごろ北海道住友石炭奔別鉱でガス爆発がおこり、一日正午までに判明したところでは死者四名、行方不明一二名、重軽傷者四名を出した。

奔別鉱は三池と同じビルド鉱として合理化に合理化をかさねていた炭鉱であり、この爆発は合理化の結果であり、石炭政策のあらわれである。

続発する炭鉱事故は、われわれの「CO患者補償打切り反対」のたたかいが全炭鉱労仂者のものであることを、ますます明らかにしている。

新労幹部共斗を拒否

三池労組は一〇月二六日、新労へ「可能なかぎり統一行動をとる」ことを申し入れたが、新労幹部は患者の悲願を無視して、二八日午前の中央委員会で三池労組との共斗を拒否することを決定した。

理由は「三池労組とはたたかいの方向がちがう」など。

われわれの共斗の相手は新労組員、家族であり、幹部ではないので、今後も積極的に仂きかけをつづけよう。

街頭署名数集約

一〇月三〇日、一せいに行なった大牟田・荒尾地区の街頭署名活動は、次のように中間集約された。

【署名数】

港務	四、六〇〇
本所	七、五〇〇
三川	一五、六九七
四山	八、三三九
宮浦	一一、五三三
計	四七、六六九

キモいりがいのないオルグの民泊

本所 本村アヤ

「オルグさんがくる」ときけば〝地域の班長さんは大変だなア〟と思います。その一因にはオルグさんにもあると思いますので、主婦らの声をきいてほしいと思います。

A「こんどオルグさんを泊めるのはお宅ですね。昨夜は心配で眠れんだったでしょう。でも、あまり、きもいらんほうがよかですよ。帰ったあとは、ハガキ一枚こんのですから……」

B「食費をもらったって赤字ですよ。せいぜいっぱい接待したって、礼状一枚こんしきもいってもばからしい」

C「世話になったと思ったら礼状くらい書くのがあたりまえでしょう」

D「オルグさんが朝食をまずそうに食べておられるので〝病気では?〟と心配してきいてみると〝僕は毎朝パン食ですから……〟だって。前もっていってくだされば、よかったのに。献立にもどんなに心配したかしれないのですよ」

主婦がオルグさんの受け入れにどれだけ心配し、気をつかっていることか、離卒されてから礼状のハガキ一枚に疲れが吹きとぶか、オルグにとられた人たちが考えてみられたことがあるでしょうか。

私たちはオルグさんたちが「三池はよかった」とのよい印象をもって帰ってくださることを願って接待しているのです。人間は感情の動物といいます。組織ということは知っていますが、接待には感情がともなうものです。心からの接待には、受け答えていただけないでしょうか。「オルグさん、いつでも来てください」の言葉が「ばからしかけん、いやよ」の言葉に変らないように。

天下り式に割当てがきて、班長さんが宿の心配にどれだけ頭を痛めておられるか、組合も一考をねがいます。

一〇月二六日は、オルグ受け入れができたのに時間まぎわで「オルグは中止」の連絡。一日がかりの準備と無駄なお金をつかい、がっかりした気持で一度に疲れが出てきてペッタリ座りこんでしまいました。

組合に一言

主婦

ただ三池へとオルグに来ていただくのは感謝していますが、昨日(一〇月二六日)も予定が狂ってしまいました。中止の連絡があったのは全部用意したあとでした。内証も休んで一生懸命に用意したあとで中止とは残念でした。どうせ家で処分するとはいったものの、とても家計が狂います。一度ならず二度ともなれば、いかなる理由にせよグチも出ます。

こんどの場合は、オルグの数の不確定がこうさせたとは許しがたいことです。そんなことではオルグの受け入れも考えものです。オルグの好結果も考えさせられます。

組合の反省を求む。どこの地域のなかでも不満がいっぱい流れていますので、私がみんなの意見の一端を申しのべます。

× ×